


■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

***** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 Today OCW 朝日講座「知の冒険」
Copyright 2012, 鈴木淳

The University of Tokyo / Today OCW The Asahi Lectures "Adventures of the Mind"
Copyright 2012, Jun Suzuki

災害と歴史学

朝日講座「知の冒険」震災後、魂と風景の再生へ 3

23.10.21 人文社会系研究科・文学部日本史 鈴木淳

■歴史としての災害研究

→歴史学は「災害」にどのような立場からアプローチできるか

史料が多く残される

But 災害そのものに関する研究はなされていない

・災害に関する史料…そのときの社会の断面を切り取ることのできる記録

組織や社会の機能が災害時の活動によって示される

→様々な状況の中で誰が人々を助けるのか cf.御救い

⇒経験を伝えることの重要性 (関東大震災・阪神淡路大震災の際の経験)

■災害教訓

1995 阪神淡路大震災 関東大震災時の延焼火災、ちくま新書『関東大震災』2004
中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会 2003-2010 伊藤和明、北原糸子

<http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/kyoukun/index.html>

1923 関東大震災報告書第2編 (応急対応) 主査

関澤愛 (旧消防庁消防研究所、現東京理科大学教授) 氏らとの対話

→一般にあまり知られていないことが問題点

「教訓」は歴史学になじまないか

「歴史は時世の有様を寫し出すものにして、其有様に就き、考案を加へ、事理を證明するこそ、史学の要旨ならん。然るに歴史は名教を主とする云ふ説ありて、筆を執る者、動もすれば其方に引付けて、事実を枉ぐる事あり。世教を重んずる點より云へは、殊勝とも稱すへきなれども、それか爲め實事實理を枉ぐるに至るは、世の有様を寫す歴史の本義に背けり。唯其實際を傳へて、自然世の勸懲ともなり、名教の資となる」

(重野安釋「史学に従事する者は其心至公至平ならざるべからず」『史学会雑誌』第1号,1889年)

→歴史学は時代の有様をそのまま写し出す (=明らかにする) ことが大切であり、

名教 (=教え・教訓) のために歴史を用いることによって事実を曲げてしまう

ことがあり、これは歴史の本義でない

←これがリースの考えと合致…実証史学が重んじられる

元に近い史料を集める、史料批判を行う → 「有様」に近づく、既存の叙述の検証

■神田和泉町・佐久間町の奇跡

→神田和泉町・佐久間町の町民がバケツリレーにより消火活動 = 「美談」として修身の教科書に載る
など評価される

⇒本当に町民のみの努力によって消火がなされたのか

1923年9月1日～2日 35時間の火との戦い

→この段階では特に取り上げられない

1933年の震災回顧 石井作次郎砲兵大佐『防空に於ける防護団の訓練』(国民防空協会)

我国の都市は、空襲と火災とは同時に予想せなければならぬ問題であって、苟くも足腰の達者な市民は、男でも女でも、其防護団員であると、無いとに拘らず、何れも火災の消防に全力を払はねばならぬことは、当然過ぎるほどに、当然のことであらねばならない。であるから、此大切な時期に、市民が何れも避難を考へて、避難所に逃げ込むやうでは**関東大震災時の失敗**を再び繰り返へすことになるものと思はねばなるまい。
←焼夷弾の初期消火の必要性

→【背景】満州事変以降、空襲・焼夷弾消火が現実味を帯びてきたこと
避難<初期消火

1939年1月 焼け残り地区を東京府が史蹟指定 「関東地方大震災当時町民協力防火守護の地」

→町民皆で守り抜いた、という意味で脚光を浴びる＝ここではじめて評価

1941年9月 東京市防衛局、震災記念堂に「焼け残り地区を死守した町民の活躍」を示す10点の絵画
読売新聞8月30日「他の町の人はいづれも僅かばかりの私財を背負ひ、わが家わが町を捨て避難したが、ここでは老人と極く小さい子供などあればかへつて足手まとひになる者達だけを上野公園に避難させ、働ける者は全部残った。」

朝日新聞8月8日「備へあれば空襲も恐れなし、震災に町を死守、バケツ戦術も元祖」

→町の位置づけ・意味づけが東京都・マスコミ報道によって出来上がっていく

文部省『初等科修身 二』（1942年2月） 国民学校4年生用（省略）

1945年3月10日東京大空襲で避難が常識に

『自警』1924年11月号（省略）

→ 山角徳太郎『大正大震火災帝都復興記念 神田復興史並焼残記』（同人、1925年5月）

事実叙述としては修身教科書の原型と思われる

警察、「住民」 視点の違い 消された、風向、機械力

→『自警』では警官の努力がクローズアップ、修身教科書では町民に視点

→回想録などをみると…

- ・風向きがよかった
 - ・ガソリンポンプメーカー有り＝水利
- }幸運にも助かった、という認識

吉村昭『関東大震災』1973年

消防活動に有利な条件（水利、周囲の耐火建築、ガソリンポンプ）が存在したことを指摘

中村清二「大震災ニヨル東京火災調査報告」（『震災予防調査会報告』第百号戊、1925年）

東京府『大正震災美績』（東京府、1924年） による叙述で防空教訓による偏向を脱却

しかし、

「住民たちが、四圍を完全に火に包まれた中で町内にとどまり、火と戦ったことは大きな賭けであった。

もし防火に失敗すれば、町内には炎がさかまき、全員焼死することが確実だった」（文春文庫版104頁）

←町民たちを賞賛＝新たな物語（美談）が生まれる

本当か

住民だけの力ではない

（PPを見ながらの説明）

- ・付近に川や下水道ポンプ所があり水利があった
- ・神田付近が燃え始めるのが遅かった…余裕を持って対応することが可能に

- ・燃え広がりには差があった…神田付近は燃え広がるのが遅く常に逃げ道を確保した状態で消火に当たることができた
- ・上野方面との連絡が地震発生12時間後も可能…子どもなどの避難が可能
- ・米穀市場があり炊き出しも行っていた…町外からの避難民も消火・警官も炊き出しに来て消火に参加

和泉町の賞与 外神田警察署 300円、青年団 227円、ガソリンポンプ提供者 130円、消防派出所 70円、在郷軍人団 30、小学校先生 20円…（東京市『東京震災録』1926年）

2日午後3,4時ころ「今迄の三方面の防火は、比較的少人数であったが、今度は外神田署員、在郷軍人、青年団員、町内会等の精鋭数百名、婦人も参加、真に身命を賭して、飽まで防火せんとの決意を固めた勇士の集であった」（『大正震災美績』） 退避したまま消防に加わらなかった121名の男性戸主例（山角）

→これが美談になるまでブランクができた原因か

But 避難した人々が積極的に復興に参加

退路を確認しての持続的な防火活動、弱者の早期避難（付添必要）、ポンプの威力、官民協力、炊出し→飛び火を防ぐという意味でも町民が残ることは重要であった

⇒現代で考えるならば…帰宅難民等も参加する体制が必要か

美談を元に語る→新しい美談を作り上げるのみ

↑

事実を洗い出すことにより教訓とする＝歴史学

■朝鮮人迫害事件の評価

石井作次郎『防空に於ける防護団の訓練』（昭和8年）

空襲は勿論、非常変災の場合に於ては、流言蜚語の行はれることは大に覚悟せねばならぬところであつて、大震災時に於ける朝鮮人騒動の如き其一例である。これは独り日本ばかりでなく、ロンドンが空襲を受けた際に於て、あの沈着温厚な、倫敦紳士の連中も、随分下らない馬鹿騒ぎを演じたことは、今日でも相当有名な話になって居るが、此等の場合に於て、能く事の真相を確かめ、市民をして其堵に安んぜしむる如くに、反対宣伝を行ひ、一糸紊れざる如くに秩序と統整とを保持せしむるものは、又此警護班の為すべき仕事であると思ふ。

→ 情報統制・一元化の必要性

報道機関の主張としてラジオ、新聞の重要性 …「正しい情報が見分けられる」という前提

→メディアの初期情報が必ずしも正しいとは限らない

←むしろ更なる混乱を生む可能性も

戦後の迫害（虐殺）事件研究

権力犯罪 治安関係者による意図的流布 →人民の連帯 ⇔ 反発

→日韓協力の時期＝人民連帯のため治安関係者を批判

民衆意識 差別意識 →解消の必要性

流言の性格 →形を変えた再発への警戒

→官・民どちらも流言に巻き込まれる

現状での問題把握

背景 差別意識と恐怖 交流・理解の乏しさと植民地支配、独立運動の武力闘争報道
→朝鮮人独立運動家に対する恐怖感

直接原因 地震災害への理解力不足 深刻な被災状況の説明、爆発音、水の濁り、被災者の行動
飛び火警戒、あるいは救護を求める呼びかけ
→爆弾、毒などの流言
→避難民などから「朝鮮人に暴行された」と証言

激化原因 治安機関の同調と増幅 内務省警保局でも2日晩から3日にかけて警戒呼びかけ
朝鮮人保護や示威の行動の影響、孤立・過労部隊の暴走
→軍隊に連行される（ように見える）朝鮮人…悪い印象

→ 災害への理解（事前・発災後の全貌報道）、流言警戒、救護、応急対応部隊の環境
外国系住民にどう見えているのかという問題

*震災時に大勢が虐殺された認識を今でも韓国人は持っている
我々以上の恐怖感

阪神淡路大震災時に行政担当者の判断、防災常識普及の難しさ

結果的には朝鮮人虐殺事件中心の歴史研究で良かった 今後もそれで良いのか

■「想定外」だから災害

想像力を広げることの必要性、その手段としての歴史研究

火災旋風、流言による混乱 具体的予測不能だが歴史的事実 ⇔ モデル化された被害予想

地震 → 津波、火災、崩壊 飛び火防ぎ 焼け跡への避難 といった忘れられてゆく常識

しかし、高層階への飛び火を防ぐために人が残るべきではない — 歴史以外の知識必要

防災関係の他分野の研究者も、もちろん過去の災害に注目している

歴史学の役割 素材の提供 史料の所在、解説、批判 情報の読み出し

歴史的経緯により偏った教訓の修正 経緯の検討は狭い意味での歴史研究

検討の多様性 現実的対応の限界から来る「想定」の枠にとらわれない

歴史学者が担うべきかどうか

・多様性を検討すること→可能性の列举

列举した上で「今できることは？」を考える

・歴史学…割り切らない、最後まで可能性を追求する学問

→災害においては様々な人がこのような認識を持つことが重要なのではないか

⇒誰でも出来る手法=きっかけ作り、やり方を広めることが使命

⇒理系・文系の枠組みにとらわれない共有すべき手法の相互共有

10月21日朝日講座 第3回

鈴木淳先生

災害と歴史学

○ディスカッション部分講義メモ（太字は質問者）

- ・ **神田和泉町を震災後に昭和天皇（摂政宮）が視察したことは10年後の評価につながるのではないか。**
 - ⇒ 摂政宮に消火について話した人は実際には消火にあたらなかった人
 - ＝ 事実ではあるが全て正しいことが伝えられたわけではない可能性も
 - ⇒ むしろ避難して消火にあたらなかった人々が町の復興に努力したこと、町外の避難民を収容したこと、米穀市場の米13000俵を寄付したことなど町としての努力が30年代の評価につながったのではないか
- ・ 「美談の文法」について
 - 美談から事実をどう導くか
 - 10年後に「美談」となる点は興味深い（10年で事実を忘れる）
 - ⇒ 客観的に現在から過去を振り返ることは新しい物語を作ることでもある
 - ＝ つくった人の意図が上手く伝わらない場合も多い
 - ＝ 世代によって異なった視点を持つため長く美談として残ることはあまりない
- ・ **口承史料にあつかいの難しさについて**
 - ⇒ 老人の知恵（経験談、語り継ぐこと）と実際に起こることや対処法のズレ
 - 経験も重要だが経験だけで対応することはできない
- ・ **中央防災会議での情報は東日本大震災に生かされたのか**
 - ⇒ 情報は広まっていない（あったとしても対応はできなかったのでは）
 - ⇒ メッセージが中々伝わらないこと
 - ⇒ 防災情報は無料で手に入ると思われている
- ・ **神田和泉町の教訓が修身教科書に載るプロセス**
 - ⇒ 元々は今村明恒の推奨した「稲むらの火」などが載せられていたが政治情勢の変化で神田和泉町の教訓が載せられるようになった
 - ← 災害対応として落ち着いて対処することを主張
- ・ **理解不足ゆえに情報のうけとり方が歪むという現実がある。正しく理解することと同時に人が想像力によって解釈もするがそのギャップをどう埋めるか**
 - ⇒ それぞれの土地によって対応は異なる…落ち着いて対応することが第一
 - ＝ それぞれの地域での危険予測・可能性を理解すること
 - ＝ 知識として持つこと（学校教育で or システム化も）
- ・ **朝鮮人殺害について、外国（特に中国など）ではどう考えられているのか**
 - ⇒ 中国では、関東大震災で殺害された中国人250人超を公表していないが…

・東日本大震災での日本人の対応によって外国から見た日本人観は変化するか

⇒関東大震災のときの日本人とは環境が変化している為日本人観も変化しているだろうと考えられる
Ex.阪神淡路大震災の際に自衛隊が救援を行った様子を見て、南米の人は軍隊によるクーデターだと考えた

→文化の差による誤解

・地震研究所のデータベース「歴史地理データベース」を見て。理系の災害対策と文系の視点をどのように融合していけばよいか

⇒歴史地理データベースは地震研究所と史料編纂所が協力（史料編纂所が地震関連史料を提供）して作成

＝相互関連した上でのデータベース化

＝歴史地理は理系・文系の融合が上手く出来る分野